



写真-1 江崎灯台（令和7年4月撮影）

■ 明石海峡を望む高台に建つ白亜の灯台

写真-1 は、淡路市野島江崎に立つ白亜の石造灯台「江崎（えさき）灯台」で、海拔約 41m の高台にあり、灯台の高さは約 8m です。今なお現役で、光の強さは白光が 6.2 万カンデラ、赤光が 2.4 万カンデラ、レンズからの光は白光が約 34km、赤光が約 30km 先まで届くそうです。

この灯台は、洋式灯台としてはわが国 8 番目の建設で、「日本の灯台の父」と呼ばれるイギリス人技師のリチャード・ヘンリー・ブラントン（写真-4）によって設計され、明治 4 年 4 月 27 日（1871 年 6 月 14 日）に初点灯されています。

明治 3（1870）年竣工の檜野崎灯台（和歌山県串本町）、明治 4（1871）年 2 月竣工の神子元島灯台（みこもとしま：静岡県下田市）に続く、現役としては国内で 3 番目に古い洋式灯台でもあります。

また、明治時代初期に大坂条約（後述）に基づき建設された 5 基の洋式灯台の最初の一つで、歴史的・文化財的価値が高い A ランクの保存灯台※¹ および近代化産業遺産です。

このようなことから、平成 30（2018）年には土木学会選奨土木遺産に認定され、令和 4（2022）年 2 月 9 日には明石海峡を行き交う船舶の近代海上交通史上価値が高いと評価され、国の重要文化財にも指定されています。



写真-2 ジェノバライン船上から撮影した江崎灯台

本灯台は、主要地方道 31 号福良江井岩屋線沿いの「緑の道しるべ江崎公園」から 200 段近い石段を上った所にあります。なお、周辺は瀬戸内海国立公園に指定され、灯台からは明石海峡大橋を望むことができます。



写真-3 緑の道しるべ 江崎公園

※1 保存灯台：明治時代に建設された現役の灯台の中で、特に歴史的・文化財的価値が高いものを海上保安庁が選んで、保存処置しているもの。日本の灯台のうち、明治時代に建設され今なお現役で活躍しているものは 67 基あるが、築後 100 年ほどが経過したことで、歴史的・文化財的価値も増してきている。そこで灯台を管轄する海上保安庁では、昭和 60（1985）年に有識者を交えた「灯台施設調査委員会」を設置し、これらの灯台の文化資産的価値を検討し、価値の高い順に A ランク（23 基）、B ランク（10 基）、C ランク（16 基）、D ランク（18 基）と 4 段階に区分した。そして、平成 3（1991）年には「灯台施設保全委員会」を設置し、A ランクに指定された灯台について、景観を損ねない範囲で改修や保存を図っている。これらの灯台を、一般に「保存灯台」と呼ぶ。なお、灯台施設調査委員会が発足する以前にも灯台の保存活動は行われており、初代酒田灯台や二代目和田岬灯台、初代安乗埼灯台のように老朽化が懸念され、元の場所に設置が困難な灯台の場合、文化施設等に移設され保存されている灯台もある。

■ 「日本の灯台の父」リチャード・ヘンリー・ブランドン

イギリスのスコットランド出身の土木技術者で、明治政府に灯台建設主任技術者として雇われ、明治初期の灯台建設を指揮しました。鉄道会社の技術助手として鉄道工事に関わっていたところ、英国商務省とスティーヴンソン事務所を介した日本政府の灯台建設技術者募集に応募し、慶応 4（1868）年 2 月 24 日に技師長に採用されました。

技師補選考ではマクヴェインとブランドルが採用され、出発にあたりスティーヴンソン事務所で 3 ヶ月間の技術研修を受け、同年 8 月、妻子及び技師補 2 人を伴って来日しました。

明治 9（1876）年までの 7 年 6 ヶ月の日本滞在中に、和歌山県串本町の檜野埼灯台を皮切りに 26 基の灯台、5 ヶ所の灯竿^{※2}（とうかん）、2 艘の灯船などの建設を指揮し、日本における灯台体系の基礎を築き上げています。また灯台技術者を育成するための「修技校」を設け、後継教育にも心血を注ぎました。このことから「日本の灯台の父」と讃えられています。



写真-4 R.H.ブランドン
（Wikipedia から引用）

ブランドンは、灯台以外でも多くの功績を草創期の近代日本にもたらしていて、わが国初の電信架設のほか、幕府が設計した横浜居留地の日本大通などに西洋式の舗装技術を導入し街路を整備しています。また、鉄道建設についての意見書を提出し、ローウェンホルスト・ムルデルらとともに大阪港や新潟港の築港計画に関しても意見書を出しています。

明治 9（1876）年 3 月、燈台寮^{※3}を退職し帰国した彼は、論文「日本の灯台（Japan Lights）」を英国土木学会に発表、賞賛を受けました。晩年、仕事の合間に書きためた原稿「ある国家の目覚め—日本の国際社会加入についての叙述とその国民性についての個人的体験記」をまとめ終えると、明治 34（1901）年、59 歳で亡くなりました。

※2 灯竿：航路標識の一つ。棧橋・防波堤などの端に設置し、夜間に港の位置を示す小型の灯台。

※3 燈台寮：灯台事務を所管した工部省の内局。明治 4 年 8 月 14 日（1871 年 9 月 28 日）、燈明台掛を改称して設置。二等寮。明治 6（1873）年 9 月、寮内に試験燈台が設置され、器機・材料の試験と同時に、燈台番の養成を行った。明治 10（1877）年 1 月 11 日に燈台局に改称。

■ 明治初期に 13 基の灯台を設置することとなった経緯

日本近海は暗礁も多い上、光達距離の短い灯明台や常夜灯の設置のみで航路標識の体系的な整備が行われていませんでした。そのため諸外国から「ダークシー」と呼ばれて恐れられていました。

元治元（1864）年に関門海峡で長州藩と英仏蘭米の四国連合艦隊との間で馬関戦争（四国艦隊下関砲撃事件）が起こり、敗れた長州藩（幕府）は多額の賠償金を支払うこととなりますが、慶応 2（1866）年に英仏蘭米の四ヶ国は賠償金の減免と引き換えに 12 条からなる江戸条約（改税約書）を幕府と結びます。11 条には「外国交易のため開港する全ての港への航海の安全のために必要な灯台、浮標、立標を整備する」と定められ、本条約によって国内に下記の西洋式灯台 8 基が設置されることとなります。

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| ① 観音埼灯台（神奈川県 初点灯 1869 年） | ② 野島埼灯台（千葉県 初点灯 1869 年） |
| ③ 檜野埼灯台（和歌山県 現存・現役、1870 年） | ④ 神子元島灯台（静岡県 現存、1871 年） |
| ⑤ 剣埼（つるぎさき）灯台（神奈川県 1871 年） | ⑥ 伊王島灯台（長崎県 1871 年） |
| ⑦ 佐多岬灯台（鹿児島県 1871 年） | ⑧ 潮岬灯台（和歌山県 1873 年） |

さらに慶応 3（1867）年、イギリスはフランスとともに兵庫港の早期開港を幕府に迫り、兵庫港への航海の安全確保のため幕府との間に結んだ**大坂条約**（大坂約定）に基づき、下記の西洋式灯台 5 基の設置が追加されました。

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| ① 江崎灯台（兵庫県 現存・現役・1871 年） | ② 六連島（むつれじま）灯台（山口県 現存・現役・1872 年） |
| ③ 部埼（へさき）灯台（福岡県 現存・現役・1872 年） | ④ 友ヶ島灯台（和歌山県 現存・現役・1872 年） |
| ⑤ 和田岬灯台（兵庫県 現存・廃灯・1872 年） | |

この江戸条約 8 基、大坂条約 5 基、合わせて 13 基の灯台を「条約灯台」と呼んでいます。

■ 阪神・淡路大震災で被災した江崎灯台

江崎灯台は冒頭の写真からもわかるように石造で、灯塔および附属舎は家島産御影石の切石積で、この上に直径 3.8m のドーム状の灯籠が据えられています。初期の光源は石油ランプで、レンズは第一等、灯質は不動白光だったそうですが、昭和 8（1933）年に電化・改良されています。さらに、昭和 56（1981）年 4 月に無人化されています。

平成 7（1995）年 1 月 17 日の阪神・淡路大震災では、震源断層である野島断層が近くを通過していることから灯台の石積みにズレが生じ、構内の地盤に地割れが生じるなど大きな被害が発生しました。

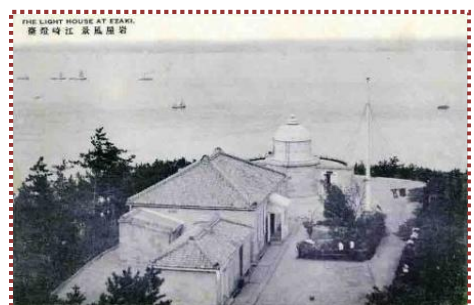


写真-5 退息所があった頃の江崎灯台
（『日本の歴史的灯台』から引用）



写真-6 江崎灯台から明石海峡および
明石海峡大橋を望む

なお、平成 8（1996）年、旧吏員退息所（灯台職員宿舎）が「四国村（四国民家博物館）」（香川県高松市）に移築・保存され、その施設が平成 12（2000）年 4 月、国の登録有形文化財に登録されています。内部には調度品や設計図等の貴重な資料が展示されています。



図-1 江崎灯台周辺の地図

■ 兵庫県南部地震を引き起こした野島断層

野島断層は江崎灯台付近を通る活断層で、兵庫県南部地震を引き起こしたとされ、その際に地表地震断層として現れました。長さは淡路市の北端、江崎灯台付近から富島地区までの約 10km にわたり、六甲山より淡路島に至る六甲・淡路島断層帯の一部にあたります。昭和 50（1975）年の地質図に活断層として記載されました。

・地震活動と断層の隆起

平成 7 (1995) 年 1 月 17 日 5 時 46 分に発生した兵庫県南部地震は六甲・淡路島断層帯が活動したために起こったもので、中でも構成断層のひとつである野島断層は震源に最も近い断層です。地震発生の際には断層南東側が南西方向に約 1~2m 右横ずれし(横ずれ断層)、同時に南東側が約 0.5~1.2m 隆起して逆断層となっています(一部、野島臺浦地区では北西側が 20~40cm 程度隆起)。この際に変位した断層面が地表に露出しました。

この断層による破壊状況が最も顕著であった北淡町小倉地区(現:淡路市小倉)には平成 10 (1998) 年に「北淡町震災記念公園(現・北淡震災記念公園)」がオープンしています。公園内に「野島断層保存館」が設けられ断層の一部が保存されています。同年の 7 月 31 日に国の天然記念物に指定されました。

なお、平成 23 (2011) 年 8 月 22 日には入館者数が 800 万人目を迎えており、淡路島有数の集客施設にもなっています。



図-2 淡路市北部の地質図

図-2 地質図の記号の説明

Ri 埋立地	Al 沖積層
Ol 大阪層群下部亜層群	Ki 神戸層群下部累層
Gr 六甲花崗岩	Gp 花崗斑岩

・過去の活動歴

断層面の掘削調査により最近の 2 万年間で 20m の変位が確認されています。また、梨本地区の掘削調査により約 1,100~2,400 年前というデータが得られ、前回の活動時期は約 2,000 年前と推定されました。一方で、文禄 5 (1596) 年 7 月 13 日に発生した慶長伏見地震の割れ残りとする説もあるそうです。

「緑の道しるべ江崎公園」から江崎灯台に続く 200 段近い石段を上がり始めると、すぐに石段がズれている場所があります。ここを野島断層が通っていて、平成 7 (1995) 年の兵庫県南部地震によって約 1.3m の右横ズレが生じています。断層亀裂の修復跡をカラーコンクリートで明示している(かなり薄くなっていますが)ので、行かれた際は是非見てください。



写真-7 江崎灯台に続く石段の右横ズレ箇所

■ モノローグ

11 月 1 日は灯台記念日です。わが国初の洋式灯台である観音崎灯台の起工日が、明治元 (1868) 年の新暦で 11 月 1 日(旧暦では 8 月 30 日)であることにちなみ、昭和 24 (1949) 年に海上保安庁により制定されました。

観音崎灯台は、神奈川県横須賀市の三浦半島東端に立つ白色八角形の中型灯台で、初代の設計は横須賀造船所首長だったフランス人技術者のレオンス・ヴェルニーが担当しましたが、大正時代の地震により 2 度再建され、現在の灯台は 3 代目にあたります。慶応 2 (1866) 年、英・仏・蘭・米と結んだ「江戸条約」によって建設を約束した 8 ヶ所の灯台(条約灯台)の 1 つで、最も早く竣工・点灯したものです。

通常、このような記念日の制定は、竣工または点灯した日とするはずで、観音崎灯台の竣工・点灯した日は新暦の明治 2 (1869) 年 2 月 11 日(旧暦:明治 2 年 1 月 1 日)です。なぜ、2 月 11 日にしなかったのでしょうか。

この点について、灯台のことに詳しい公益社団法人「燈光会」にメールでお尋ねしましたが、「当時の海上保安庁の判断としか申し上げられません」とのこと。

ただ、うがった見方かもしれませんが、2月11日は戦前に神武天皇の即位日をもって定められた祝日「紀元節」にあたり、昭和22(1947)年、片山哲内閣により、日本国憲法にふさわしい祝日の法案に紀元節を「建国の日」として盛り込んだところ、連合国軍最高司令官総司令部により削除された経緯があり、この点を考慮して起工日を記念日にしたのかも(気にする必要はないと思いますがねえ)。

この日は、各地の参観灯台(内部が常時一般公開されている灯台)への参観が全て無料で開放され、「燈光会」や各地の海上保安部などで記念行事が行われます。

ボケ(木瓜)

バラ科ボケ属の落葉低木で、原産地は中国大陸。日本へは平安時代に渡来し、観賞用に栽培された帰化植物である。果実が瓜に似ており、木になる瓜で「木瓜(もけ)」とよばれたものが「ぼけ」に転訛したとも、「木瓜(ほくわ)」から「ぼけ」に転訛したとも言われる。『本草和名』(918年)には、果実の漢名を木瓜(もくか)、和名を毛介(もけ)として登場する。移植は容易だが、大気汚染・潮害にはさほど強くない。右のボケ、海沿いの民家の庭先に咲いていたが大丈夫かな？



写真-8 江崎公園近くの民家の前に咲いていたボケ

【参考資料】

- 1 『兵庫県の近代化遺産』 兵庫県教育委員会事務局文化財室編 平成18年3月
- 2 『明石海峡を見守る歴史的灯台』 淡路島観光ナビ 2022年10月
https://awajikanko.com/esaki_lighthouse/
- 3 『公文書に見る明治日本のアジア関与～「燈台寮」』 国立公文書館アジア歴史資料センター「アジア歴グロッサリー」
<https://www.jacar.go.jp/glossary/term3/0010-0080-0040-0010-0170.html>
- 4 『条約灯台：江戸条約・大坂条約』 すずきたけし 2024年11月
<https://note.com/kakunoshins/n/n1e02c7c2be71>
- 5 『灯竿』 デジタル大辞泉
- 6 『神戸開港150年によせて～外国人居留地と神戸』 田井玲子 平成25年11月
- 7 『リチャード・ブラントン、江崎灯台、保存灯台、野島断層、観音崎灯台、灯台記念日、レオンス・ヴェルニー、紀元節、ボケ』
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発刊：令和8(2026)年6月 『ひょうご水百景』No.229

改訂：令和8(2026)年8月 『ひょうご水百景』No.229